



住まい備忘録 第20回

特定非営利活動法人 蒸暑地域住まいの研究会

宮古島のエコハウス

伊志嶺 敏子 (伊志嶺敏子一級建築士事務所)



南側を開き、母屋と離れの間に涼風の通りぬける半戶外空間

宮古島市にエコハウス(環境省補助事業)二棟が完成した。一棟は旧平

良市内に建つ『市街地型』で、もう一棟は旧城辺町の友利地区に建つ『郊外型』である。

今回は『郊外型』を紹介したい。所在地の友利地区は農村地帯で、高齢者が多く住み、二世帯住宅のニーズの高い地域でもある。そのことから、この『郊外型』を農家・二世帯住宅モデルとして設計をすすめてきた。

宮古島で設計をすすめる上でまず第一にあげられる条件は耐台風型であること、そして蒸暑い夏を快適に過ごせることである。言い替えるとシェルター性を高めるために

はなくなり、

又、日常の快適さを優先して開いてしまおうと

被害をこうむってしまおう。実に悩ましいことである。だから先人達は、風水の良い場所を選び、集まって住み、環境集住体として「閉じつつ開く」手法を形にしてきたものだと思われる。そこには、あらゆるレベルのバッファがある。



西日と北風を避ける花ブロック壁

環境集住体のDNA

は閉じ、アメニティー性を高めるためには開く、つまり「閉じつつ開く」という相矛盾した課題を抱え込んでいることになる。

宮古島の先人達もこの難題に翻弄されていたであろう。非日常の台風災害に対応して閉じることを優先させてしまうと日常が快適で

強風を弱めたり、涼風を引き入れたり、集住の中にフライバシーのグラデーションが有り、暮らしの秩序がある。それは鳥空間のエコハウスそのものである。

このように知恵の集積した環境集住体のDNAを引き継ぐことから現代のエコハウスを始めたいと考えた。

一方、先人達の残した課題もある。その課題は、シェルターとしての住まいをつくるのに精一杯で以前の経済事情からする

ができる。家というものは、その時代に見える経済力と言えるのかも知れない。

軒を深く張り出して、雨の打ち込みを防ぎ、西日の強い軒先、北風の当たる軒先に花ブロックを積み、いろいろなバッファとしての半戶外空間、そして周囲のふく木をはじめとする防風林、環境集住の知恵がそこにある。エコハウス、かならずしも新しいところみではないことに気付かされている。